

平成 17 年 11 月 29 日

～地域と協力して、池袋エコ化プロジェクト～

立教大生がツタの移植でまちを緑化

立教大学阿部治ゼミナールの学生たちが、地元NPO法人ゼファー池袋まちづくり（齊木勝好会長）の協力のもと、立教大学のツタを移植することでまちを緑化することを企画。本日11月29日（火）9時30分から、池袋西口公園（豊島区西池袋1-8-26）にツタの移植を行った。

本日は、阿部治教授とゼミ生18人、NPO法人ゼファー池袋まちづくり齊木会長をはじめとした地元の方々、区職員などが参加、池袋西口公園のステージ横にある更衣室や倉庫として使用している建物の壁面3面に2株ずつ、計6株のツタが植えられた。

立教大学阿部治ゼミナールは環境問題をテーマに活動。この取組みは、11月4日～6日に立教大学池袋キャンパスで行われた学園祭において、学内及び学校がある池袋を環境にやさしいまちにしようと同ゼミが企画した「立教と池袋におけるエコ化プロジェクト」活動の一環。学園祭では、排出されるゴミを環境に配慮したものにとしよう、飲食出店者に土に埋めると分解されるエコ容器（サトウキビの絞りかすから製造）の使用を徹底させた。その使用済みのエコ容器に立教大学のツタと土を入れ、移植をすることによって、池袋に緑を増やしていこうとする取組み。

ツタの移植のきっかけは、学園祭でエコ容器の使用を企画するにあたり、エコ容器にはコストがかかることから地元の商店街に協賛のお願いに回っている中で、せっかくエコ容器を土に埋めるならツタを植えたかどうかという提案があったこと。この提案を受け阿部教授は、ツタを植えることで、まちに緑が増え、ヒートアイランドの緩和、温暖化防止対策にもつながる。また、夏には緑が、秋には紅葉がみられ、人が集うまちになっていくと考え、学内のみならず、学校があるまち池袋をエコ化しようというプロジェクトのコンセプトに合っていたことから実現。阿部教授は、「この取組みが、大学が地域と密接な関わりをもつひとつのきっかけになれば」と語る。

ツタは立教大学のシンボル。大正7年に建設された立教大学本館（モリス館）は、赤い煉瓦造りの壁に、ツタの絡まる趣のある建物。東京都選定歴史的建造物にもなっており、立教大生のみならず、地域の人々にも親しまれている。また、ツタは大変成長が早い植物で、緑化を進めるのに適した植物でもある。

移植後のツタの継続的な管理については、ゼミ生が中心となって、学生のボランティアや地元の協力を得ながら行なっていく予定。

阿部ゼミの4年生吉田晃徳さんは、今回の企画について「持続可能な池袋のまちづくりを行なうというエコ化プロジェクトのコンセプトにも合い、協賛してくれた地元へ恩返しにもなる」と話している。参加したゼミ生は、「池袋はビルだらけの雰囲気なので、自然を増やしていきたい」と豊富を語る。

ゼファー池袋まちづくりも事業のひとつとして、花と緑を活用した環境整備を行なっている。齊木会長は、「これからも学生さんのアイデアをどんどん出してもらい、連携しながらまちづくりを行なっていきたい。卒業しても学生たちが気楽に来られるいい街にしていきたい。」と地域と学生が一緒に行なう取組みに期待をしている。

今後、西口五差路の東京メトロ出入口に設置されるエレベーターの建物、換気塔（現在工事中）に移植することが計画されている。その他にも区有施設等に移植を行っていく考え。

今回の移植が第一歩となり、この取組みが区全体に広がっていくことが期待される。緑が増え、環境がよくなるとともに、まちの活性化にもつながっていく。

詳細：立教大学阿部治ゼミナール